目が覚めたら世界が終わってた

flat_flater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めたら世界が終わってた

【Ｎコード】

Ｎ４３４３Ｚ

【作者名】

ｆｌａｔ＿ｆｌａｔｅｒ

【あらすじ】

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

――とかだったら少しは格好がついたものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。これは自称魔法使いの恋咲凛音（こいさき・りんね）が、ならず者や巨大モンスターの闊歩する町でひっそりと生きていく話＊＊＊ちょいちょい加筆・修正が入ります＊＊＊

＃０１　目が覚めたら世界が終わってた（前書き）

阿鼻叫喚のモンスターパニックと超能力バトルを合わせた感じの小説を書きたかった。

#01　目が覚めたら世界が終わってた

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。
――とかだったら少しは格好がついたものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。

＊

私の名前は恋咲凛音（こいさき りんね）。聖歌学園に通う3年生だ。
ちなみに聖歌学園なんて少し恥ずかしい学校名をしているが、特にこれといって特徴の無い普通の学校だ。
が、それじゃ私がつまらないので、生徒会長になってから「ごきげんよう週間」を作ったことがある。
生徒会役員（女の子）を校門に立たせて、登校してきた生徒に向かって「ごきげんよう」と挨拶をさせるのだ。
教員連中が少し難色を示したが、校風の革命云々それっぽいことをつらつら話したら、短期間ならという条件付で許可をもらった。勿論ただの私の趣味だが。
恥ずかしそうに頬を染め「ご、ごきげんよぅ……」と挨拶をする女の子を見て、一部の男子生徒は涙を浮かべ、更には遅刻常習犯の生徒数名がその週だけは異様に早く登校してきたりと、なんだか思わぬ副次効果があったりもした。
勿論、一番喜んでいたのは私だが。

っと話が逸れた。

取り敢えずは私の位置情報の確認だ。まぁ、これはＧＰＳを使うまでもない。
朝、起きてからずっと家に閉じこもっているから。
私が住んでいるのはアースクエイク桐ヶ谷という学園と駅の丁度中間くらいに位置する小綺麗なマンションの４階の４号室（４０４号室）だ。ドキッとするような名前のマンションだが、耐震性はしっかりしているらしい。

妙にダルイ身体を起こして、入学時に買った黒い目覚まし時計を見てみると、短い針が１１と１２の間くらいを指してた。
一瞬焦ったけど、どうせ遅刻なら盛大に遅刻してやれと思い直し、インスタントのレモンティーを作ってベランダの扉を開け、カップに口をつけながらいつもの外の景色を眺めた。
晴れ渡る空の下（もと）、人が走ってた。
というか絶叫してた。
見える範囲の道路は車で埋め尽くされ、所々で事故が起こってた。
んで、人々の絶叫と車のクラクションをＢＧＭにして、
なんか――でっかい鳥みたいなのがいっぱい走ってた。
これが３０分くらい前。

――で、まぁ、ここまではいい。
いや、だいぶ良くないけど、取り敢えずはいい。問題はその後だ。

私は驚いた。なんたって、目が覚めたら外が凄いことになってるんだよ？　いつも冷静を気取ってる私でも流石に少しは驚く。
んで、驚いた拍子に手に持っていたカップをベランダの外に落としちゃったわけだ。
勿論、カップは重力に反することなく落ちていくよね？　具体的には重力と空気抵抗が釣り合った感じで。
ほんの数分前まで、私もそう思ってた。

カップを落とした私は焦ったさ。雑貨屋で２０００円も叩(はた)いて買った、黒猫柄のおしゃれなやつで、私が今一番気に入っているカップだったから。
私はベランダから身を乗り出して落ち往くカップに向かって手を伸ばし、そして叫んだ。

「逝くなーッ！」

私は自分の物は大切にするから、小さなものでも一つ一つがもの凄く大事なわけだ。
しかし、流石の私でも物理法則に抗あらがうには１０年ほど早かった。
カップはシャンッ！　と音をたてて、地面に吸い込まれた。私は泣いた。
泣いて、泣いて、涙にぼやける両目で、遠くに見える黒猫カップの亡骸をぼんやりと眺めてた。

その時だ、壊れたカップが、まるで天に召されるかのように宙(ちゅう)に浮き、私の前まで飛び上がってきた。
最初は夢かと思った。私の淡い幻想が起こした幻かとも。
でも、違った。
それは物理法則を一切無視するかのごとく、宙に浮いたまま動かな

い。
レモンティーの雫を纏った細やかな破片が、太陽の光を反射してキラキラと光る様子に私は目を奪われた。
しかしそれだけじゃあ、あんまり面白くない。もっとこう、ぐるぐると回る銀河みたいな感じで。
と、思ってたら、カップの破片たちがなんかこう、銀河がぐるぐる回る感じで回転しだした。
マジで？　と思って、こんどは止まれっと念じてみた。瞬間、空中をぐるぐると回っていたカップの破片たちがピタリと静止した。
１０年なんてもんじゃなかった。
――どうやら私には物理法則を凌駕する力があるらしい。

＊

と、いうのが今までの出来事の一連の流れ。
外に出るのは危ないらしいので今は自宅待機だ。
んで、昔バードウォッチング用に買った双眼鏡を構え、文字通りバードウォッチングをしている。
でっかいニワトリだ。
大きさがはんぱないことと、人間を食べてることを除いたら。
ニワトリのあのカクカクとした動きは割りと可愛いと思っていたけど、撤回だコレ。
２メートル近いニワトリにやられたら軽く恐怖だった。
注意してみると、その太い嘴（くちばし）で自動車の窓ガラスを貫いている。

そして慌てて出てきた人を、更に一突き――しようとしたところで私が放った高速の弾丸（マーブルチョコ）が急所である眼球へと突き刺さる。
ピギャー！　と悲鳴をあげてよろめくニワトリ。
間一髪で難を逃れたサラリーマンの中年おやじが悲鳴をあげながら逃げていく。

「よしっ」

私は口に含んだいくつかのマーブルチョコを噛み砕き、笑った。

今、私の頭の上で色とりどりのマーブルチョコが円環を描（えが）きながら浮いている。
最初は一つずつ宙に浮かせる練習をしてたんだけど、一つ、二つと増やしていくうちに一箱、二箱になって、今は多分四箱分くらいになっていると思う。ちなみになんでマーブルチョコかというと単にあの綺麗な配色と形が気に入ってるからだ、あと美味しいし。

私は頭上で回るマーブルチョコのうち一つを自分の口内へと誘導した。
うん、やっぱり美味しい。
よもや私の人生で手を全く使わずにマーブルチョコを食べる日がこようとは、いったい誰が想像できようか。
これこそが私の第一の魔法、虹色の円環（オート・マーブル）である！　ちなみに今、命名した。
うん、即決にしてはカッコいいんじゃない？　マーブルってなにか知らないけど。

とにかく、騒ぎが一段落するまではここで高みの人助けを決め込もうと思います。

#０２　現状を確認しよう

『――総理は今回の報告を受け、警察の手には余るとの判断を下し一刻も早い自衛隊の出動を――』

＊

あれから一時間が経過した。
今まで４階のベランダから下を見下ろしながら、ニワトリから逃げる人を助けてたんだけど、みんなそれぞれ避難したのか見える範囲で確認できるものといったら、穴を穿たれ捨て置かれた車、小火（ぼや）を起こしたのか煙をあげている民家、散乱したガラス……そして、逃げ遅れた人々の死体と、それを貪（むさぼ）るニワトリ型のバケモノ。
どれもこれも思わず目を背けたくなるような光景ばかり、私が数時間前まで住んでいた世界は形を変え、全くの違うものへと変貌していた。

流石の私も結構疲れた。
なにか知らないけど、魔法を使うたびに精神的な何かが削られていくような感じがするのだ。
最初は何も感じなかったんだけど、３０分、４０分と時間が経つほどそれが顕著に感じられるようになってきた。
私はその削られていく何かを、仮に魔力と呼んでいる。
あえて言うが、これは超能力なんかじゃ断じてない。魔法だ。
そっちの方がなんか、ロマンがある。

ところで、情報化社会である今日（こんにち）、家にいながらにして国内だけでなく世界各地の情報を手軽に集めることが出来る。

そして、ここ数時間のニュースは大きく三つに分けることが可能だ。
一つは、知ってのとおりバケモノの襲来。
ただこれはニワトリだけに留まらないらしく、かなり色々な種類がいるらしい。バイオテロによる元来の動物の突然変異という見方が一般的だが、現実味はない。なにせ、世界中で同時に発生してるわけだから。

二つ目は、超能力者（まほうつかい）が出現したこと。
これもここ数時間でかなりの数が観測されているらしい、ネットでは賛否両論な感じで騒がれてる。つまり否定派の意見として、ヤラセじゃね？　とか、非科学的だ、とか。
何時間か前の私なら同じように否定したかもしれないが、この情報は確実だと思う。ソースは私。

最後、三つ目は奇病の話。
これも、ここ数時間の間に起こっており、そして最もたちが悪い。
簡単に説明すると、この病気に罹（かか）ると少しずつ身体が弱っていき意識を失う。そしてその後、身体がまるで水晶のように結晶化するらしい。
原因は不明で致死率１００パーセントの難病だ。
年齢が１０〜２０代にはほぼ影響がなく、患者はそれ以外の年齢層がほとんど、という噂（うわさ）もあるけど、確証は無い。と。

「ふぅ……」

私は開いたいくつかのサイトを閉じ、メモ帳に書いた文章を保存する。

「えと、ファイル名、ファイル名……『プリンが食べたい．ｔｘｔ』

……エンターッ！　よし、できたっ！」

私はノートパソコンを閉じ、立ち上がると現在は閉め切っているカーテンを少しだけずらし、外の様子を垣間見た。

「いやぁ、だいぶひどくなってきたなぁ……」

先ほど調べて、バケモノには色々な種類がいると言ったが、そのとおりだ。
実際外をチラリと見ただけで数十の鳥が我が物顔で空を舞っている。
勿論ただの鳥じゃない。なんていうか、プテラノドン級のやつだ。
全身真っ黒な羽毛に包まれているため、おそらくもとはカラスだったんだと思う。超怖い。

安易に外へ繰り出して、ぱくりとやられるのは嫌なのでしばらくは家に引きこもろうと思う。
魔法を使いすぎて身体もダルイ。

「シャワーでも浴びよう……」

正直、この状況でいつまで電気や水か使えるか、分かったものじゃない。
今のうちに贅沢の限りを尽くしておこう。まぁ、たいした贅沢は望めないんだけど。

＊

お風呂のお湯を魔法で動かしたりして遊んでいたら、余計身体がダルくなった。
でもおかげで不定形なものを操るのはかなり難しいと言うことが分

かった。今度から魔法の練習は水でしよう。

お風呂からあがった私は、まず、これからの引きこもり生活のために必要不可欠な食料を確認すことにした。
とにかくまずは水から。なんたって人間、水だけでも何週間かは余裕だとかどっかで聞いたことがある。
私は部屋の片隅に押しやっていた大きく膨らんだゴミ袋を引っ張り出す。それにはごみに出すために大量に溜め込んでいたペットボトルが大小約二十個ほどが入っていた。

さて、今からこれ全部に水を入れていく作業に入る！

「うぅ、終わったぁ」

ひとつひとつはたいしたことは無くてもこれだけの量の水を長時間ペットボトルに入れ続けるのは大変な重労働だった。
私はかじかむ両手をさすりながら満タンになったペットボトルを満足げに見下ろす。
これで、しばらくは大丈夫だろう。

よし、次は、食べ物だ。
私は冷蔵庫を開けた。
が、一人暮らしの冷蔵庫なんてたいしたものは入ってない。数種の野菜と冷凍された肉類、といったところだ。
米も先日ほぼ使い切ってしまったためあと一合あるかないかといったところ。
私は他にもめぼしいものがないかと部屋中を探した。
１５分後、他に見つかったのは、インスタントラーメンが３個。以

上。

すくなっ！

なにこれ！？　こんな装備で私にどうしろと！？
やばい、私、しばらくは本格的に水だけで生活することになるかもしれない。くそぅ、もっと非常食とかいっぱい買い込んどくんだった……。

まぁ、こればかりは仕方がないとあきらめるしかないか。

#03　外に出てみよう

世界が終わったのが5日前。
水道が止まったのが3日前。
食料が底をついたのが2日前。
電気が止まったのが1日前。

――私の我慢の限界が来たのが5分前のことである。

＊

「うわぁぁぁーーーーーーー！！　おーなーかーすーいーたーーーー！！！！」

二日も何も食べてない。
と、いうか、2日目にしてインスタントラーメンを食べきったのが悪かったのかもしれない。
デリバリーでピザでも頼もうかと思って、電話してみたけど全くつながらない、ちくしょう。
残っているのは、マーブルチョコが二つ。
サバイバルにはよくチョコレートと聞くけど、あいにくこれだけじゃ全くお腹が膨れない。早急に食料を調達する必要があるだろう。

私はカーテンの隙間から外を覗いた。
数は少なくなっていたが、まだいる。黒い羽毛に包まれたカラスのバケモノだ。
ふいに、電信柱の頂点に止まっていたソレと目が合った気がして、

慌ててカーテンを閉めた。

私はベッドに倒れこみ、魔法でマーブルチョコを一粒口内に移動させ、カチカチと音をたてて動く掛け時計の針を眺めながらこれからのことを思案した。

食料も無い、水ももう少しで尽きる、電気も無い。

そんな家にいつまでも引きこもっていてもいずれ餓死するのは明白だ。

それなら、まだ身体が元気なうちに思い切って外に出てみるほうが得策かもしれない。

いや、絶対にそれがいい、うん、そうしよう。

私は、ガバッとベッドから身体を起こし、服の入ったクローゼットを漁った。

戦闘に備えて出来るだけ動きやすい服を選んでいく。

膝丈のハーフパンツとレギンス、黒の長袖インナー、最低限必要そうなものをいれた小さめの皮のショルダーバッグを背負い、その上からスポンとポンチョを被った。

今年の冬は冷えるとのことだが、余分な厚着は動きを制限するし、第一私自身寒さには強いのでこんなものでいいのだ。

靴も動きやすさを重視したスニーカーだ。

私は玄関に座り込み、靴紐をきつく締め終えると、自分の家の玄関を6日ぶりに開けはなった。

＊

開けた瞬間、血の匂いが冷気に乗って私に押し寄せてきた。

久しぶりの外の匂いは随分と変わっており、私は眉を顰(ひそ)めた。

「早くしないと」

第一の目標は食料の調達、後は現状の詳しい情報が知りたい。

私は無意識にエレベーターへ乗ろうとするが電気が止まっているのを思い出して、階段へと向かった。

出来るだけ足音を立てないように、ゆっくりと階段を下り、遂にマンションの外へと出た。

空を見上げると大きな鳥が獲物を探るように旋回しているため、安易に飛び出したら普通ならその時点でぱくりだろう。

が、そこは私。

忘れていると思うが、私は魔法を使える。

しかも、この5日間それを使いこなす練習を積んできたのだ。大丈夫、いける。

私はポケットからビー球を一つ取り出し、目の前に浮かせ旋回する鳥に向け照準を合わせ、射出した。

初速から、最高速度で発射されたビー球は凶弾となり、悠然と空を飛んでいた巨大な鳥の身体にのめりこんだ。

「ギャァーー！？」

と何が起こったのか分からないといった様子で痛みにもがきながらも墜落はせずに、他所(よそ)へと飛び去っていく。

「硬いなぁ、やっぱり威力が足りない、弾も使い捨てだし節約しないと」

まぁ、その辺の石をぶつけてもいいわけだけど、それは私の趣味に反するため却下だ。

もっともそうならないように弾はそれなりに用意した。
が、少なくとも今の私じゃ、一匹を倒すのにもかなり苦戦を強いられそうだ。
私は膨らんだポケットに手を突っ込みながら、歩みを進めた。

食料調達のために立ち寄ったコンビニ数件は、ほとんどが荒らされ、食料という食料がなくなっていた。
人間の仕業か、バケモノの仕業か分からないがこうなったら少し離れたショッピングモールまで行くしかなさそうだ。

ため息をついて、本日5件目のコンビニを発とうと開けっ放しの自動ドアから外に出た。
と、その時、「キャァーーー！！」と女性の甲高い悲鳴が響き渡たり、その悲鳴の聞こえた方角から、数名の学生と思われる集団が走ってきた。
と、いうか私の学校の生徒だった。久しぶりに人間を見た気がする。
しかしその顔は皆恐怖に染まっており、私の存在など見えていないようだった。
そして口々に叫ぶ。

「やばいよ！　早く、早く逃げないと！！」

「嫌だ！　死にたくないっ！！！」

「だ、大丈夫よ！　あの役立たずもこれでやっと役に立ったんじゃない！？」

「しかたがなかったんだ！！　許してくれっ！！」

私は直ぐに理解した。

誰かを囮として使ったことを。

私は逃げる女子生徒の服を掴んで強引に引き寄せた。
そして顔を思いっきり近づけ問いただす。

「どこっ！！」

「ひっ！？　え？　か、会長ぉ！？　なんで……！！」

女子生徒は自分の学校の生徒会長の姿を見て驚いているようだが、こちらにそんな暇は無い。

「いいから教えなさい！！　置いてきた人はどこにいるの！！！」

私の剣幕に押されたのか、女子生徒は泣きながら答えた。

「あ、あの、曲がり、か、角の向こう、ですっ」

私はそれを聞くと女子生徒を解放し、彼女が指差した方向に向かって全速力で駆けていった。

#04　戦ってみよう

私の魔法はかなり便利で使い勝手もいいのだが、一つ欠点が存在する。
それは内側にほとんど作用しないこと。
つまりは、自分自身を浮かび上がらせることが非常に困難であることだ。
外側への干渉はそれなりに使いこなせるだけに、何で？　というのが本当のところだが、こればかりは謎である。

＊

住宅街を走り抜け、女子生徒が指差した曲がり角を曲がる頃には、私は肩で息をするほどに疲れきっていた。文化系なめるな。
しかし、全力疾走しただけのことはあったらしい。
一人の女子生徒が、アスファルトの地面にへたり込み一匹のバケモノに追い詰められていた。
幸い大きな怪我は負ってないようだ。
バケモノの方は……やっぱりそうきたか、という感じだった。
茶黒い体毛に鋭く尖った爪、ピンと伸びた耳、涎（よだれ）を滴（したた）らせ大きな牙を覗かせる口。
犬、とは生ぬるい表現だった。
そのライオンを二周りほども大きくしたようなワンコは女子生徒を塀（へい）の方へと追い詰め、ゆっくりと距離を縮めている。
私はポケットからビー玉を一つ取り出し、ワンコに向かって思いっきり投擲した。

物理法則に従い放物線運動を描き飛んでいたそれは、途中、第二の法則により急加速する。
目にも留まらないスピードで、私の放った弾丸はワンコの身体に吸い込まれた。
ワンコが突然の刺激に驚き、巨体のわりに随分と俊敏な動きでその場から飛びのき私の方へと身体を転換し、低いうなり声をあげる。

あれ？　もしかして、全然効いてない？

そう思い私が第二投を撃とうと、ポケットに入った無数のビー玉を一掴みしたところだった。
うなり声をあげながら様子見をしていたワンコが、地を蹴り、私との距離を一気に詰めてきた。

「ちょ！　はや――！」

焦った私は、手に握ったビー玉を地面に落としてしまう。
コロコロとゆるい傾斜を転がっていく無数のビー玉。

「くっ！」

私は手に残った一つのビー玉を、今なお涎を振りまきながら接近してくる躾（しつけ）のなっていないワンコに向かって射出した。
ノーモーションかつ高速で飛来するビー玉を初見で避（よ）けるのは難しい。
ビー玉は私の狙い通り、ワンコの額部（ひたい）に突き刺さった。
しかしワンコは衝撃に一瞬よろめくも、頭を数回左右に振ると、白濁した瞳で私を睨みつけ、警戒するような動きで私から距離をとる。
予想以上に硬い！　多分鳥の数段上だ。

おそらく私の攻撃は毛皮に阻まれて、肉体にはほとんど届いてないだろう。このままじゃ、何度やってもこいつを倒すのは不可能な気がする。
さて、どうしよう。

私は、残ったビー玉をポケットの中で弄(もてあそ)びながら、ワンコの背後に見える女子生徒を見た。
気を失っているようで、塀にもたれかかり目を閉じている。

「これは、逃げるわけにもいかないか……」

私はポンチョを脱ぎ、身軽になると、残ったビー玉を取り出し自分の頭上へと誘導、そして半自動的な円環運動をイメージした。
虹色(オーロラ)の円環(マーブル)と、その場のテンションでちょっとアレな名前をつけたこの魔法(わざ)は、決してただのかっこつけだけものではない。実際私はここ五日間、部屋にこもって魔法の練習と検証ばかりをやっていたのだ。
この魔法(わざ)は多少のリスクも背負うが、その分メリットもある。

唯一にして最大のリスクが、常時の魔力消費による疲労度が大きいことだ。
しかし、それを除けばメリットはかなり大きいと言える。

まず最初に、半自動での円環運動をイメージしたことにより、余程のことがない限り武器が自身から離れることがないということ。
更にこれは、いちいち意識を向けなくても最初にイメージをしてしまえばあとは勝手に運動してくれるので、戦闘に非常に向いていると言える。

第二に、インターバルゼロでの連射が可能だということ。

集中して一撃一撃を放つのとは違い、これは少しだけ意識を向けるだけで弾が円環運動の軌道を離れ、私の意図した方向へ飛んでいく。そして多少だが威力が上がる。

「さて、さくっと勝負を決めないと」

私がこの状態で戦えるのは、実践だと３０分持てばいいほうだと思う。

これからのことを考えると力は温存しておきたい。

私は頭上で回転する無数のビー玉に意識を向けた。

ヒュ、ヒュ、ヒュ、と小さなそして鋭利な音をたて、３つのビー玉が連続で発射される。

しかしワンコの両目を狙った私の攻撃は機敏な動きによって悉く(ことごと)回避された。

内、二つはワンコの胴体部分に命中したが、どうせ大したダメージは無いはず。

そのうちワンコは私が大した脅威ではないと確信したのか、再度私に襲い掛かってきた。

刃物のような牙が私に迫る。

車のような速さで迫り来る巨体に、ちまちまとした攻撃は意味がない。

「ああ、もうっ！　全部行け！！」

私は迫るワンコに向け、全弾を発射した。

#05　ご褒美を堪能しよう

私が苦し紛れに放った弾幕は螺旋軌道を描きながらワンコに襲い掛かる。

ドドドドドドッ！！　と、鈍く重い音の連続。ワンコの表情が歪んだ。

そして、その内の一発がワンコの左目に命中する。

「ガアアァ！！」

やった！　そう思ったその時、苦しみにもがくワンコの前足が私に振り下ろされ、その爪が私の太股をザックリと切り裂いた。

ぷしゃっ、と鮮血が舞う。

綺麗だな。

最初は自分の太股から吹き出る血しぶきをまるで人事のように観察していたが、時間がたつごとに患部が熱を持ってくるのを感じた。

そして数秒後、それを自覚する。

今まで感じたこともない、常に身体を何かで抉（えぐ）られ続けているような激痛が私を襲った。

「あ〝あ〝ぁーー！　ぐぅ、い、いた……」

私は激痛に耐えながら、目の前で暴れるワンコから距離を取ろうとするが、切り裂かれた左足が言うことを聞いてくれない。

切り裂かれた左太股を見るとパックリと皮膚が捲くれ、ピンク色の肉が見え隠れしている。

出血もひどいし、このままでは血の流しすぎで死ぬ！

私は無作為に振り下ろされる凶刃を地を転がるようにして避ける。
動くたびに感じる激痛を我慢しなんとか反撃しようと、転がっている小石類を魔法でぶつけようとするも、集中力が散漫になり上手く操ることができない。
やけくそ気味にワンコに放った小石類はほとんどが意図した方向とは違う方へと進み、ワンコのほうは当たろうが、当たるまいが関係ないとばかりに私に迫ってくる。

「もう！　しつこい！」

背負っていたショルダーバッグをワンコへ投げつけるも、中身を散らばらせるのみでただワンコを興奮させただけのようだった。
ワンコの怒り狂った攻撃が続く。

いくらワンコが痛みに錯乱していて攻撃が単調だったとしても、足に怪我を負った私では避け続けるのにも限界がある。
四撃目を避けた時には私の体力は限界に来ていた。
そして五撃目、私の頭を喰いちぎる気なのか開かれた顎（あぎと）、そして凶暴に尖った牙が私に襲い掛かってきた。
左足の激痛に朦朧としながらも、私は起死回生の一撃を放つため周囲の武器になりそうな物を探した。

ゴロンッ。

と、私の目に最初に飛び込んできたのは、鈍い光を発して輝く野球ボール程の大きさの石。
あぁ、そういえばこれも持ってきたんだった。
おそらく、先ほどショルダーバッグを投げつけたときに中からこぼれ落ちたのだろう。

私は、フッと笑みを浮かべる。

「……頼むよ？」

薄れゆく意識の中で放ったその石は眩しい輝きと共に私の手を離れるやいなや、ワンコの身体を一直線に食い破った。
混濁する意識の中でその様子を見届ける。
そして、プツリと意識が途切れた。

＊

「――んぱい――きてください」

身体を揺さぶられる。
深い眠りに誘(いざな)うような優しい振動。

「――なないでください」

ああ、やけに心地のいい感触だ。
それになんだかいいにおいが……。
あ、そういえば私死んだんだっけ。
だったらこのかわいい声は天使かな――。

「せ、んぱいっ！　めぇ、あげてぐだ、ください！」

と、女の子の悲痛な泣き声と共に、私の意識が完全に覚醒する。
まず目に飛び込んできたのは、適度な大きさに膨らんだ世界で最も

美しい双丘。
どうやら私は女の子に抱きかかえられているようで、ほとんど顔を胸にうずめている状況らしかった。
彼女はまだ私が目を覚ましたことに気づいていないようで、私をぎゅっと抱きしめながらすすり泣いている。

なので、仕方が無いのでもっとこの状況を堪能することにしようと思う。

顔を、柔らかくいいにおいのする胸へとうずめる。
クンクン、あ～いいにお～いだ～。
ほお擦りほお擦り、と。

「ん……ぁ、せ、んぱい？」

スンスン、スンスン。
あ～、たまらん、ずっとこうしてたい。
もう私は絶対離れないぞ。
そうだ、これは対価だ。私がんばったし、少しくらいご褒美あってもいいよね。
うん、これは神様からの私へのご褒美に違いない。

は～、柔らかくてきもち～な～。
モミモミ。

「ぁっ、んぁ、ゃ、ん……せ、んぱぁぃ」

うりゃ、更にほお擦りほお擦り。
か～ら～の～、モ～ミモ～ミ。

「ぁ……せん、ぱい、ゃあ、ん、だ、だめぇー！！」

「ぐはっ！」

「あぁ！　ごめんなさいっ！！　大丈夫ですか！？」

はっ！　あまりの嬉しい状況に少しばかり混乱していたようだ。
心配そうに私を覗き込む女の子を見上げる。

制服は泥だらけで、スカートなども所々が破れている。
リボンの色は青なので一年生なのだろう。
目に付くのが、肩まで伸ばしたサラサラの黒髪。
――この娘を含め私も通う聖歌学園という学校は校風も比較的ゆるく、茶髪もやり過ぎない程度になら許容されているため、このような黒髪はわりと珍しかったりする。まぁ私も生まれてこのかた髪を染めたことは一度も無いのだけど。ナチュラルで未加工なままである。――
身長はあまり高くはないようだが、出てるところは出ているみたい。
まぁ、これは私がさっきまで堪能していたわけだが。

それと顔のほうは、これはもう可愛いと一言で表すしかない。
化粧はしてないように見えるが、もとがいいのかスッピンでもそこらの変に化粧した女よりも断然可愛い。
少々たれ目で、優しそうな雰囲気を持っているのもポイントが高い。
と、いうか、なんだか顔もほんのり赤くなって、息遣いも……ジュルリ。

「あの、せ、せんぱい？　大丈夫ですか？」

はっ！

「あ、ああ、うん、大丈夫、もう大丈夫よ、ちょっと混乱してたみたい、ごめんね？」

「あ……いえ、ぅ、私は別に……」頬をほんのりと染める女の子。マジ可愛い。

さて、と。私もそろそろ起き上がるとするか。

そう思い立ち上がろうとしたとき――

「って、あれ？」

私は妙な違和感に気づくのだった。

#06　疑問を抱いてみよう

なんというか、普通に起き上がれることに対する強い違和感が……。
なんだっけ？　え～と……私は確かワンコと戦って、足を怪我して、んで負けそうになっ――
……私、左足怪我してなかったっけ？

＊

引き裂かれたハーフパンツとレギンスの下に見える太股は血はついているものの、怪我の痕跡が全く見当たらなかった。
今気づいた、妙な違和感はそれだ。
あれだけの怪我が自然に治るわけがないし、そういえば痛みどころか疲れすらないような……。
え？　ワンコと激闘を繰り広げたのって私の夢？

私はバッと後ろを振り向くと、私が倒した（ような気がする）ワンコの巨体を探す。
と、すぐ隣ににぐったりと横たわる茶黒い毛皮を発見した。
探すまでもなかった。
めっちゃ伏せしてる。
え、でも夢じゃなかったってことは……。

「あ、あの、せんぱい」

私がウンウンと唸っていると、女の子が心配そうな表情で私の上着（チョ）の裾をつまみ、と弱々しく引っ張ってきた。

「うん？　どうしたの？」

何気なく私のツボをついてくる仕草に対し心の中で身悶えしながら、私は微笑みを浮かべた。

生徒会長選挙のために覚えた、私の持てる限りで最上のの笑顔だ。

それに対し女子生徒はほんのり赤かった頬を更に紅潮させながらしどろもどろに言った。

「えっと、そ、その、か、身体のほうは大丈夫ですか？　ぅ、私、いっぱい血が出てたからどうしたらいいか分からなくてっ、せんぱいの服少しだけ破いちゃいました。その、ごめんなさいっ！」

私は、女子生徒の突然の謝罪に一瞬困惑する。

というか、え？　服？

いや、確かに全力で破れてはいるけど、これは９９パーセントあのワンコが悪いし……？

「あの、ちょっといいかな？」

「は、はいっ」

いや、そんなに怯えなくても……まぁ、いいんだけど。

「大丈夫、怒ってないよ。それよりさっき、血が出てたからって言

ったよね？」

「は、はいっ」

「間違いない？」

「は、はいっ、間違いないです……あの、それで……」

ふむ、なるほどね。
これは、あれだ、今流行（はやり）の魔法ブームだ。
おそらくこの娘（こ）もその波に乗っている感じなのだろう。
で、その力で私の怪我を治してくれた、とそういうことだろう、多分。

「うん、君が怪我を治してくれたんでしょ？　ありがとう」

「あ、あの、何も聞かないんですか？　怪我のこと……」

「う～ん、なんとなく予想がつくからね」

私はそう言って地面にかがみこむと、転がっていたビー玉を一つ拾った。
そして、おもむろに宙へ浮かべ、びっくりした顔をしている女の子の周りをゆらゆらと浮遊させた。
女の子の視線はビー玉に合わせ左右を行ったりきたりしている。
私はクスリと笑みを浮かべた。

「多分君もこんな感じの力が使えるんじゃないかな？」

「えと、よ、よく分からないです。パァって傷口が光って、そした

ら……」

うん、多分間違いない。これは回復系かな。
しかし、魔法を使える人って実はいっぱいいるのだろうか。

「そっか、とりあえずありがとう」

「い、いえ、それよりそれ……」

「ああ、これ？」

私は浮遊させていたビー玉を女の子の前にゆっくりと落としていった。
女の子がそれを不思議そうに見ながら両手で受け止める。

「ちょっとした魔法……とにかく場所を変えようか。ずっとこんな道路の真ん中にいたら危険だしね」

「はい、分かりました」

さて、まずは散らばった荷物を拾わないと、ついでにまだ使える弾丸（ビー玉）も拾って、と。
ワンコの周りには無数のビー玉が転がっており、私はそれらを一つ一つ拾い集めていく。

うーん、結構集まったな。
私はビー玉を集めたポケットをジャラジャラと鳴らしながら、取り残しがないか軽くあたりを見回した。

「お？」

と、ワンコの身体の下で何かがキラリと光ったような気がして、ためしにワンコの側でかがみこんでそこを調べてみた。
よく見ると、ワンコの身体で陰になるようにして淡い光を放つ小さな宝石のようなものがある。
拾い上げて明るいところで見てみると、太陽の光を反射してキラキラと輝いた。

「それ、なんですか？」

「う～ん、なんだろうね？」

そういえば、と思い立ち私はあるものを探す。
私が最後にワンコに放ったあの石。今拾ったものはそれに良く似ていたのだ。

もともとあの石は、初日、私がベランダからニワトリを狙撃していた時に発見したものだ。
はじめの方はチョコを飛ばしたりして半分遊んでいたのだが、途中からはもっと硬いものをと何故か溜め込んでいたビー玉を使いだした。
ニワトリは比較的防御力が低いようで、ビー玉での攻撃を何十発か命中させるだけで倒れた。
その時に、その倒れたニワトリの近くに転がっていたのがあの石だ。
ビー玉とも違うような、太陽の光を受けきらめくその石に対し私はどこか不思議な力を感じ、魔法を使って上まで引き寄せ、ずっと部屋に保管していた。
そして、今日外へ出る際になんとなくそれを手に取りショルダーバ

ッグの中に入れておいたというわけだ。
まさか、それが私の命を救うことになるとは思わなかったが。

目的のものは、ワンコから１０メートルほど離れたところで見つかった。
しかし、それは全体にひびが入っておりもともとの淡い輝きを綺麗に失っており、前みたいに不思議な力を感じることもない。
私は、一応それも拾い上げポケットに入れると、ゆっくりと息を吐(は)いた。

#07　食料を調達しよう

彼女の名前は白水蓮（しらみずれん）というらしい。
いい名前だねと言ったら照れながら笑ってた。

＊

「り、凛音ちゃん……」

「ん、どうしたの？　蓮」

互いに自己紹介をしてからは私たちは名前で呼び合うことになった。
というのも、当初私が白水さんと呼んだときに、彼女自身から名前で呼んでほしいと頼まれたのだ。
それで、だったらということで、私のことも名前でいいよ。と言ったわけだ。
最初は、せんぱいを名前で呼ぶなんて無理ですよ、と言っていたのだが私が懇願すると折れてくれた。

凛音さんとか凛さんとか候補としてはあったのだが、前者はどこか固すぎるし、後者は、なんだか、薬品みたいだし。
なのでいっそのことちゃん付けをしてもらうことにした。
これはこれで新鮮味があっていい感じだ。
まだ私の名前を呼ぶときに少し言葉に詰まるのだが、それはそれでいい感じだ。

「や、やっぱり、あかんよ……」

「大丈夫、大丈夫、ちゃんとお金は払うから」

「せやけど……」

それと蓮の口調だが、別に私が京都弁萌えなわけではない。いや、否定はしないが強要してるとかじゃない。
私が、せっかくだし敬語も外してみて？　とお願いした時必要以上にもごもごとしていたため、なんで？　と聞いてみたら、京都育ちなので方言が恥ずかしいとのこと。
京都弁のことでよくない思い出があるのだろうか、少し陰のある笑顔で笑っていた。
なので、蓮の頭をなでなでしながら、話しやすい口調でいいんだよ。と優しく笑いかけながら言ってみた。
決してただ撫でてみたかったからじゃない。
「凛音ちゃん……おおきに」と、少し涙目で言う蓮に理性がちょっと危なかったのは秘密だ。

ちなみに私は現在、お店にある長持ちしそうな食料を黙々と袋に詰めているところだ。
ワンコと戦った場所から歩いて約二十分程のところにあるそれなりに大きなショッピングモール、その食料品売り場に私たちはいた。
電気が止まっているため全体的に薄暗く、やっぱり人の姿も見えない。
道中、何度かバケモノの類（たぐい）に遭遇しそうになったが、なんとか襲われることなくここまでたどり着いた。
電柱におしっこをしていた、私が戦ったやつよりも一回り大きいワ

ンコと目が合ったときは心臓が止まるかとも思ったが、出すものを出すと私たちのことを無視してどこかへ歩いていった。

「え～と、缶詰、缶詰、うわぁ全然ない」

チョコ類、カップメン類、缶詰類など、日持ちのしそうな食べ物を探しているのだが、なかなか収穫がない。
多分私と同じような考えの人が他にも大勢いたのだろう。
しかし缶詰コーナーに関しては、それなりに残っているほうだった。

え～と、どれどれ。

ひよこ豆、インゲン豆、ソラマメ……お、ミックスビーズってのもある、あ、こっちはグリーンピースだ。

……。

「凛音ちゃん、こ、これはどうやろ」

私が落ち込んでいると、蓮が私を心配そうに見ながら、缶詰を一つ持ってきた。

――もも缶だった。

「蓮っ！」

力の限り抱きしめる。

「わ！　えっと、だめやった？　そこに落ちてたんやけど……」

「ううん最高！　偉い！　可愛い！　結婚しよう！」

「り、凛音ちゃんっ、女の子同士で結婚はできひんよ！？」

そうやって蓮とじゃれ合っていたとき、ふと私は背後になにかの気配を感じた。
蓮を守るようにして、戦闘態勢を整える。

「だれ！？」

私はポケットに手を突っ込み、弾丸（ビー玉）を握り締めながら空虚な空間に向かって叫んだ。
すると、ガサリと音をたて、一人の男が姿を表したかと思うと、それに続いて男の仲間と思わしき連中が続々と現れる。
皆一様にいやらしい笑みを浮かべており、何を考えているのかは大体想像がついた。

「り、凛音、ちゃん」

怯えた蓮が私の背中にぎゅっと抱きついてくる。
が、残念なことに喜んでいる暇はなさそうだ。
男達が口々に言う。

「やべマジ上玉じゃん」

「つか怯えてんし、かぁーわいーー！」

「ぎゃはははっ！！ばーか！　お前の顔がこえーからだろ！！」

「そこの君、隠れてないでお兄さん達といいことしない？」

「なに？　お前ああいうの趣味だっけ？　俺的には手前なんだけど」
「まー、ぶっちゃけ、やれればだれでもいいってゆーか？」
「ブスには全く容赦しないくせしてよく言うよな！」

あー、これは私が最も係わり合いになりたくない類の人種だわ。
なんだ、この見るからに不良です。みたいな格好と口調。
もうちょっと個性だしていこうとか思わないのかな、毎回不思議に思うんだけどさ。

私は左手を蓮の震える手に伸ばし安心させるように握り締める。
小声で大丈夫だからと囁き、男達を睨みつけた。

「私たちに何か用？」

感情を殺し、できるだけ相手を刺激しないような言葉を選ぶ。
こういう手合いは下手なことを言うと意味なく逆上する。
穏便に済むのならそれが一番なのだ。

「おい、聞いたかっ？！　何か用？　だとよ！」
「おいおーい？　そりゃ俺たちのセリフじゃね？」
「そーそー、つか何勝手に俺たちのもん持ち出そうとしてるわけ？」

む、言葉を間違えたか。
「私たちに何かごようかしら」のほうが淑女っぽくてよかったかな？　いや関係ないか。
私が思案していると、
「おい、聞いてんのか！？　いいから盗ったモン出せって言ってんの！」
「ばかお前、あんま怖がらせんなよ、ただでさえ顔こえーんだから」
「いーんだよ、どうせこのあとで散々悦ぶことになるんだから」
あ～、いかん、頭が痛くなってきた。
こう、何人かに次々と話されると頭が混乱するんだよね。
言ってることは意味不明だし、誰かが代表して喋ってくれれば楽なのに……。
そう考えていると男達は何を勘違いしたのか声を上げて笑い、内一人がにやりと品のない笑みを浮かべて言う。
「くくく、気丈な女もこう言うと大抵あんたみたいな反応すんだよね」
「ベッドの上じゃ、いい声で啼くくせにな」
「俺たち結構良心的なんだぜ？　身体で払ってくれれば万引きも見逃すっていってんだよ？」
「だからお前、ＡＶの見すぎだっつの！　ぎゃはははっ！」

「おーい！　後ろのねーちゃんも隠れてないでちゃんと顔見せてみろよ」

ふるふると震えていた蓮の身体がビクリとして、私の手を握る力が一層強くなった。

多分、一度見捨てられたことで大きなトラウマが出来ているんだろうと思う。

あー、こいつら早く消えてくれないかな……。

ダメだ、イライラしてきた。

#08　窘めてみよう

「おい、シカトかよ、いいからこっち向けって、大体お前みたいにビクビクしてる奴に限って淫乱なんだよな」

そう言いつつ、私たちを囲みこむように近づいてくる男たち、その内の一人がその汚い手で蓮の細腕を掴もうとし、

「い、いやっ！」

「はいっ、捕ま〝え〟ッ！！――」

ドサリ、その手は空を掴み、男はそのまま地面に崩れ落ちた。

＊

私は怒っていた。

最初は話し合いで解決しようとも思ったが、何しろ口を挟む暇もない。

剰(あまつさ)え私だけならともかく蓮を貶(おとし)めるような言葉をペラペラと。

だから男の一人が蓮に触ろうと手を伸ばしたとき、私が前もって地面に転がしておいた弾丸(ビー玉)をその男の顎(あご)を目がけ思いっきり直撃させたとしても仕方のないことだろう。

それにしても、顎って本当に急所なんだ。

あの人、操り人形みたいに崩れ落ちたけどまさか死んでないよね。

「お、おい、大丈夫か！？」

「き、気を失ってる……」

男のお仲間さんたちが突然のことにざわざわと騒ぎ始める。
良かった、死んでないっぽい。
だったらこれくらいの力加減で大丈夫か。

「てめ！　何しやがった！？」

「さぁ……なんだろう、ねっ！」

更に一発、また一発と、仕掛けた爆弾（ビー玉）を次々に起爆させていく。
その度に皆同じように自分の股間を押さえ悶絶。
急所は何も顎だけではないのだ。

更には、今回は相手が人間である以上弾丸（ビー玉）も使い回しが効くため、
私の魔力が尽きるまでは永遠と続けられる。
ワンコが異常に硬かっただけで、人間ぐらいだったらビー玉でも十分な致命傷は与えられるのだ。

「ちょ、何だこれ――おぅっ！！」

「は？　は？　なに！？　どうなってん――のぉほぅ！！」

「お、おま、お前――んぅっ！！　ここぉぉ……お、俺、二発目……」

「死ぬ、死ぬぅ！」

「ふふふ、ねぇどうする？　素直に謝るんだったら、再起不能にだけはしないであげてもいっかな～と思ってるんだけど。正直、生きるか死ぬかの戦闘の後だとあんたらなんて児戯にも等しいし」

ある物は地をのた打ち回り、またある物はピョンピョンと不恰好に飛び跳ねている。
皆共通して股間をしっかりと押さえているものだから面白い。
ふと、蓮のほうを見てみると急に奇妙な行動をしだした男達を呆然とした顔で眺めていた。

「く、誰がてめぇに！」

「えいっ」

「んほぅっ！！」

＊

「すみませんでしたっ！！」

数分後、そこには土下座して謝る不良どもがずらりと陳列した姿があった。
私はそいつらを見下ろすように仁王立ちし、上から不良どもを見下ろしている。
蓮も私の手を握り、恐る恐るひれ伏す不良をうかがっている。

「もうしない？」

「はい、誓ってもうこんなことはしませんっ！！」

「じゃあ、とりあえず蓮に謝って」
「蓮さんっ！　本当にすみませんでしたっ！！」
「ふぇっ？　あ、あの……」
「残念……許してもらえないみたい」
私が再度ビー玉をちらつかせると男達が一斉に青ざめる。
「そ、そんなっ！？　姐（ねえ）さん！」
「姐さん言うなっ！」
「ヒィィィッ！！」
「わー！　凛音ちゃん、もうええよっ、うちはもう気にしてへんよっ？！」
「……そう、分かった、蓮がそう言うならもうしない……良かったね？　蓮の心が広くて。感謝しときなさい」
「蓮さんッ！！　ほんっとうにありがとうございましたーーっ！！！」
「あんたらの変わり身の速さにはいっそ感心するわ」
「ありがとうございますっ！　自分ら、強きにおもねり弱きをくじくを信条にしてるッスから！」

「褒めてないから。あと最低ね」
「ありがとうございますっ！！」
「だから、褒めてないっての、なに？　ふざけてんの？」
「ヒィィィッ！！」
「ワンパターンか！」
「凛音ちゃんっ落ち着いて！」
はっ！
いかんいかん、なんかこいつらの雰囲気に乗せられてたわ。
「ごほん、あー、それで？　本当に反省してる？」
「反省してますっ！！」
「そっか……ところでここにあったはずの果物の缶詰なんだけど、どこにあるか知らない？」
「し、知りま――」
「チラリ」
「よく存じ上げておりますっ！」
「だよね。で？　あんたら豆嫌いなの？　まだいっぱい残ってるけ

ど」

「いえっ！　後で食べようと残しておいただけですっ！！　自分ら、好きなものは最後に取っておく感じッスから。豆、大好きッス！」

「そ。だったら他のものは私たちが貰ってもかまわないよね？」

「どうぞ、好きなだけお持ちくださいっ！！」

……はぁ。

まぁ、このくらいで許してやるとするか。

なんか、もうめんどくさいし。

「分かった、じゃあもう顔上げていいよ」

「姐さ――凛姐（りんねえ）さんっ！！」

「だから、誰が姐さんか……まぁいいや、ほら、早く立ちなさい。もう何もしないから」

「――――」

「ちょっと聞いてんの？」

「――へ！？　あ、いえ……もうちょっとだけこうしていたいかなぁと」

「なに？　足でも痺（しびれ）れてるの？」

「いえ、その――」

何こいつら、そんなに土下座が好きなわけ？
さっきからもぞもぞしてるし、挙動不審だし。
と、なんとなく不良たちの視線を追った先には、膝丈のスカートからすらりと伸びた蓮の綺麗な足があった。
スカートはスリット状に破れており、それを一層なまめかしく見せている。
そして不良たちの視点からはその中まで、見えて――。
「キャッ！」
私よりも、一瞬先に不良たちの視線に気づいた蓮が顔を真っ赤にしてスカートを押さえ、私の背中にしがみついた。
私は自分のこめかみがピクリと動くのを感じる。
「はぁ……全く反省してないみたいだね……お姉さん残念だよ……」
にっこりと笑いかける。
「ヒイィィッ！！　いや、違うんです！！　これは、そのっ」
「これは？　何かな？」
「蓮さん！！」
「ふぇ、は、はい……」
「ありがとうございましたっ！！」

その後、数十分にわたって、彼らの絶叫が響き渡った。

#09　休憩してみよう

最初は、もう少し人がいたらしい。
バケモノが現れ、この食料品売り場にも少なからずの避難者が集まった。
異変が起こり始めたのは、その直ぐ後だったと言う。

＊

「消えた？」

私は不良たちに鉄槌を喰らわしたあと、詳しい事情を聞くために不良たちがここ最近立てこもっていると言う店の従業員専用の小部屋のようなところに集まっていた。少々タバコ臭いが灯油ストーブも設置されておりそこそこに快適だ。
蓮が少々怯えていたが、暖かい環境にそれなりの食糧も揃っているため身体を休ませるには丁度いいだろう。
私は蓮と一緒にソファーへと腰掛けると桃の缶詰を開けて、蓮に食べさせてやる。
嬉しそうに微笑む蓮。
不良連中は床に正座である。

「はい、その、俺らと一緒にいた中年の親父なんですけど、急に倒れたと思ったら、身体がどんどん石みたいになっていって……」

と、不良リーダー――葉山というらしいが特に興味はない――が言う。

「アレ、マジできもかったよな？」
「そうそう、おっさんの石像とかまじ勘弁だし」
「はいはい、それで？」
蓮に食べさせてやりながら、自分でも食べてみる。
実に2日ぶりの食事だ。
桃の甘みと水分が私の身体を潤していく。
「はい、それで、なんか気持ち悪くなって、そのまま放置してたんです」
「はい、蓮、あ～ん」
「でも、俺らも鬼じゃないんで、次の日におっさんがどうなってるのか見にいったんですけど――」
「蓮、おいしい？」
「うん、おいしいよ。凛音ちゃんも」
「ん、あ～ん」
は～、蓮に食べさせてもらうと八割り増しくらいに美味しいなぁ。
「……姐さん、聞いてます？」
「んぐんぐ、む？　ひぃてうよ。……っ、それで、見に行ってみたら綺麗さっぱりだった、と」

「あ、はい。……それと噂なんですけど、もう地球にほとんど人が残っていないとか」

「へ～、あっ、そこの人、お茶入れてくれる？」

「は、はいっ、姐さん、今すぐ」

「二人分ね～」

「心得ています！」

私は、厳(いか)つい顔をした不良の一人が灯油ストーブの上に置いてあったヤカンを取り、いそいそと急須(きゅうす)にお湯を注ぐのをぼんやりと眺める。

私がここに来るまで人に全く出会わなかった理由(わけ)、それが例の病気のせいだとしたら私たちも安心していられない。

世界中で発生しているわけだし空気感染するのかな。情報だと１０～２０代には被害者がほとんどいなかったはず、つまりその年代には例の病気に対する何らかの抗体が――。

「姐さん、お待たせしま、熱っ！！　あっ！」

手を滑らせた不良の手から、湯飲みがその中身を撒き散らしながら落下する。

しかし、それがそのまま床にぶちまけられることはなかった。

湯飲みとその中身、その周辺だけが時間が止まったようにピタリと静止している。

そのハイスピードカメラのワンシーンのような状況に、私以外の全ての人間もまた固まるようにして見入っていた。

「ったく、気をつけなさいよ？　蓮が火傷（やけど）でもしたらどうすんのよ」

私はそう言いながら宙に飛び散ったお茶を全て湯飲みの中へと移動させると、そのまま湯飲みごと落とした不良につき返す。ふわふわと宙に浮く湯飲みに困惑しながらも不良は湯飲みを受け取った。

「もう一度お願いね？」

私は笑いかけながらそう言った。

＊

私はいれなおしてもらったお茶を啜り、ふぅ、とため息を吐いた。と、不良リーダーが静寂を破って話しかけてくる。

「姐さん、超能力者だったんですね」

そして、次々に、

「姐さん、ぱねぇッス！」

「か、かっけー……」

「うお、マジかよ」

なに、何でこいつらこんなに驚いてるわけ？

ちょっと前に散々見せてやったはずなんだけど。
というか。
「超能力者じゃなくて魔法使い。分かる？　この違い」
「え？　いや、よく分からないッスけど」
「なんか違うんすか？」
「はぁ……あんたら、ごみ屑以下ね、いっそ死ねばいい」
「ええ！！？　そこまでッスか！！？」
私はお茶を半分ほど飲み、湯飲みをテーブルに置いた。
そして、隣で両手を使ってお茶を飲む蓮の太股に、ゆっくりと自分の頭を預ける。
「わっ、凛音ちゃん、あぶないよ？」
「ん～……ちょっとだけ」
はあ、柔らかい。
蓮が「凛音ちゃん、眠たいん？」とふんわりとした声で聞いてくる。
やばいな、ほんとこのまま寝ちゃいそう。
「あの～姐さん？」
「あ、そうそう、その超能力者についてだけど、なにか知ってる？」

蓮の太股を頬で堪能しながら、不良たちに問いかけた。
お茶を飲み終わった蓮が私の頭に手を添えて優しく撫でてくれる。
蓮の細くて繊細な指の感触がたまらなく気持ちいい。

「い、いえ、そっちも噂程度で、実際見たのは姐さんが初めてです、マジビビリました」

「そう……」

誰にでも使えるわけじゃないのか。
それとも、ただ自覚ができていないだけなのか。

「っべぇ！　興奮してきたわ！」

「姐さん！　俺らにも使えないんすか！？」

「ん～……私からは何とも……なんかこう、体のどっかにもやもやとしたチカラを感じたりしない？」

「チカラっすか？　いえ、特には」

「ふ～ん。蓮は？　なにか感じない？」

顔を上に向け、二つの胸の向こうに見える蓮に訊ねる。
私の顔を覗き込むようにしていた蓮と目が合った。

「ふぇっ？　あ、えっと、その、ウチも、よーわからへん、ごめんな？」

何故か顔を真っ赤にしてあたふたしている。かーいい。

「そうですか、つまり、そのチカラを自覚できれば俺たちにも可能性はあるってことですか？」

「へ？　あ、うん……知らないけど」

私がボソリと呟いたのは聞こえなかったようだ。
不良たちは目を爛々と輝かせ、自分に一体どんなチカラが宿っているのか。といったことで盛り上がりだした。
まぁ、勝手にしてくれたまえ。

「っし！　分かりました姐さん！　俺ら精進することにするッス！」

「うん、がんばってね、あと、今から少し寝るからしばらく出てってもらえる？」

「分かりました姐さん！　見張りは俺らに任せてください！」

「うん、ありがと」

バタン、と音をたてて小部屋の扉が閉められた。
扉の外から聞こえる不良たちの笑い声が遠ざかっていく。
私は扉についている内鍵を魔法で回した。

#09　休憩してみよう（後書き）

不良リーダー（葉山さん）：それなりに常識人
不良A：影薄い
不良B：AVが好き
不良C：怖い顔
不良D：すんごい元気

#10 Present For You

目が覚めると目の前に天使がいた。

＊

私は、すやすやと寝息を立てて眠る蓮を起こさないようにソファーから起きあがると、蓮の細い腰に手を回してソファーに倒して楽な体勢にしてやる。
あれからずっと私に膝枕をしてくれていたようだ。
ふと自分の腕時計を見ると、もう夜の七時を過ぎているところだった。

三時間近く眠っていたのか……。

冬の七時の空は暗い。
この部屋も、灯油ストーブから見える仄かな明かりがぼんやりと光っているだけで、ストーブの火のボゥッと燃える音とその上に置かれた古びたヤカンがボコボコと沸騰する音以外は、蓮の寝息がかすかに聞こえるだけだった。
その驚くほど静寂な空間に何故か心が安らいだ。
私はストーブを取り、簡易台所の蛇口から水を加え直すと――ここの水道はまだ生きているようだ――再度ストーブの上に置きなおした。

「……んっ、凛音ちゃん？」

と、その音で目を覚ましたのか、蓮がソファーからゆっくりと体

を起こし、目の端を袖で擦りながら私の名前を呼んだ。

「蓮、ごめんね、起こしちゃった」

「ううん、ええんよ……凛音ちゃん、何しとるん？」

私に気づいた蓮が安心したように微笑みを浮かべ、立ったままストーブに手を当てていた私の側へ近づき、私の隣に立った。ふわりと、やわらかで優しい香りが漂う。

「う～ん、特に何も、私も今起きたから……ふふっ、蓮の膝枕気持ちよかったよ？」

「そ、そうなんや……えへへ、実はウチもよくおばあちゃんにしてもらってたんよ」

「そっか、じゃ、また今度してもらおっかな～」

「あ、その、凛音ちゃんがして欲しいなら、ウチはいつでも……」

なんでもないような会話が実に心地いい。

夜の静けさと部屋の雰囲気も相まって、まるで世界に二人だけが取り残されたかのような不思議な錯覚を覚えた。もっとも実際それに近い状況ではあるんだろうが。

「あっ」

その時、蓮が一つだけ付いた窓を指して小さな声をあげた。

「ん？」

「雪」

「お、ほんとだ」

雪なんて久しぶりに見たな。
そういえば、こっちに来てからは初めてのような気がする。

「ホワイトクリスマスやね」

「は？」

蓮が振り返ってにっこりと言い、舞い落ちる雪をぼんやりと眺めていた私は、思わず間抜けな声を漏らしてしまう。
え、ちょっと待って、え～と、最初の日が二十日だったから……一、二、三……あ。

「忘れてた。あ～、蓮とはもっとちゃんとしたクリスマスを過ごせればよかったんだけど……ごめんね？　気の利いたプレゼントもなくて」

買いにいける状況でもないしなぁ。
私、今何か持ってたっけ……。

と、そんなことを思っていると、ふと、頬に柔らかくて暖かな感触を覚えた。
しかし、いつまでも味わっていたいような、蕩(とろ)けるような感触は直ぐに消え、代わりに顔を真っ赤にして俯いた蓮が言った。

「そ、その、えと……こんな状況でこんなこと言うのも変なんやけ

ど……ウチ、凛音ちゃんとお友達になれて本当に嬉しくて……や、やから、ウチは、えと……今日凛音ちゃんと知り合えただけで最高のプレゼントをもろうとるん、よ？」

……え～と？

あ、これは、あれか。抱きしめればいいのか？　抱きしめてチューすればいいのか！？

ていうか、なんだこの可愛すぎる生物（いきもの）はっ！

私はこんな可愛い子に育てた覚えはありませんですわよっ！？

私が身悶えしていると、蓮が不安げに私を見て、

「り、凛音、ちゃん？　……その、嫌やった？　や、やったらごめんな、ウチ変なこと言う――ふぁ」

語尾がどんどん小さくなるり、声が小さく震える。

仕方ないので、蓮をこちらに引き寄せ、ぎゅぅっと抱きしめておいた。

小柄で線の細い蓮が私の腕の中にすっぽりと収まる。

「全然嫌なんかじゃないよ？　私も蓮と友達になれて凄く嬉しい。今年は、まぁ、こんな感じのクリスマスになっちゃったけど、また来年も、そのまた次だってあるんだしさ、その時は今日よりもっと素敵なクリスマスを過ごそうっ……ね？」

「凛音ちゃん……うん」

「だから、今回はこんなもので我慢してね？」

抱きしめた蓮の首に両手を回して、私がいつも身につけているドッグタグを付けてやる。
蓮の顔が目と鼻の先にあり、少し距離を詰めるだけで簡単にキスができそうだ。

「あっ」

蓮が自分の首から下がっている銀色のプレートを見て、小さく声をあげた。

「お友達記念。私の名前と血液型が入ってるんだけど……要らない？」

蓮が頭を取れそうな勢いで横に振る。

「……でも、ええの？」

「うん、そんなものでよければ」

「ううん、嬉しい……おおきに凛音ちゃん」

「どういたしまして」

どうやら、喜んでもらえたみたいで一安心だ。

そう思っていると、蓮は自分の髪から先端に綺麗なガラス球の付いたヘアピンを抜き取り、スッと私の髪へと付けてくれた。

「お返しや」と、恥ずかしそうに笑う蓮が可愛いくて、私は蓮の前

髪をサッと払うと、おでこに触れるだけの口付けをした。

「蓮、これからもよろしくね？」

「凛音ちゃん……」

ストーブの仄かな灯りに照らされて、しばらくの間見つめあう。

ぐぅぅーーーー。

「……今の」

「あ、あ、その……」

わたわたと慌てる蓮。

私は蓮から離れ、軽く頭を撫でながら言った。

「ご飯でも作ろっか？　お友達記念兼クリスマスってことでなんか豪華なものにしよう」

そのあとは、蓮にも手伝ってもらって鍋料理を作った。

野菜類はいいとして、肉類もまだ使えそうなものが多く、かなり本格的なものが出来上がった。

少し量が多くなりすぎたため、不良どもも仲間に入れてあげると泣いて喜んでいた。

というか、本当に今まで見張りをしていたらしい。ご苦労なことで。

#10 Present For You（後書き）

KOISAKI
RINNE
BLOOD TYPE AB

#11　これからどうしよう（前書き）

で、でき……た。（ガクッ）

#11　これからどうしよう

「凛音ちゃん……凛音ちゃん」

ん……。

「凛音ちゃん、朝ごはんできたよ。一緒に食べよ？」

寒……あと五分……。

「……ちゅっ」

――……。

――ん？　今何か……。

頬に何か生暖かいものを感じ、重たい目蓋（まぶた）をうっすらと開ける。

知らない天井……私を覗き込みにっこりと笑う美少女――蓮。

朝の冷たい空気と一緒に、卵焼きのいいにおいが私の鼻腔（びこう）をくすぐった。

これが、今日の始まり。

＊

「ん、おいしい」

テーブルに並べられたお皿には綺麗な色をした卵焼きが載っている。
一つ食べてみると、だしの甘みがほんのりときいていて凄くおいしかった。
なんと朝ごはんは蓮が早く起きて手作りしてくれたようで、いつもは朝を抜く私も喜ばざるを得ない。
もう一生嫁にはやらないでおこう。
「そうか？　えへへ、昨日の鍋の残りで味噌汁も作ってみたんよ？」
私の隣に腰掛けた蓮に味噌汁の入ったお椀を手渡される。
見える具材だけで、大根、白菜、豆腐、ごぼう、肉団子――。
あ、朝から豪勢だな。
どれどれ……ズズッ――うまっ！
「ど、どうやろ」
蓮が感想を聞いてくる。
「凄くおいしい。いつも朝は何も食べないんだけど……蓮の料理だったら毎朝でも食べたいくらい」
「もぉ、凛音ちゃんはお世辞がうまいなぁ。でも朝はちゃんと食べなあかんよ？」
「お世辞じゃないよ。まぁ私はちょい低血圧気味だから食べる時間がないってのもあるんだけどね……」
私は、味噌汁を啜りながら今日のことについて考える。

とは言え、選択肢は大きく二つ。
ここに留まるか、ここを出るか、だ。

前者の場合は、うまくいけばあと一ヶ月以上はそれなりに生活できるはずだ。それだけの食料の蓄えがここにはある。
しかし、それは私たちだけで、と言う意味だ。
生存者たちが食料などを求めてこのショッピングモールの食料品売り場に駆け込んでくるのは時間の問題だろう。
そして、おそらくその時は激しい食料の奪い合いが始まり、はては殺し合いにも発展しかねない。
この状況――多くの人間が消失し、外には凶暴なバケモノが闊歩している――なら十分にあり得ることだ。
まぁ、現に私も襲われたわけだし。

後者の場合は、ここを出た後どこに向かうか、だ。
候補としては、私の家。
元々はただの食料調達に来ただけなんだからこれも大いにアリだ。
それから、学校が現在どうなっているのか知っておきたい。
私は曲がりなりにも生徒会長であるわけだし、一応友達もいることだし。

そういえば、あいつ大丈夫かなぁ。
死んでないといいけど……。

「蓮はこの後どうしたい？　もし家に帰りたかったら私が連れてってあげるよ？」

私は思考を手放すと、蓮にも意見を仰いだ。
今まで何も言ってなかったが、この子も自分の家に帰りたいのかもしれない。

私の都合で振り回すのも、気がひけた。
「え？　その……ウチは……」
「うん？」
「一人暮らしやから家はええよ……それより凛音ちゃんは家族のこと心配やないの？」
蓮は家族のことはあまり聞いて欲しくないようで、明らかに話を変えてくる。
なので私もそれ以上は触れないことにした。
「私はいいの。心配は心配なんだけど、まぁ見えない相手を心配するよりはまず自分の心配しないとね」
「……り、凛音ちゃん」
「ん？」
「ウチ、これからも凛音ちゃんと一緒におってもいいん？」
おずおずと話しかけてきたかと思ったら、そんなことを言ってくる。
ちくしょう可愛いな。
私はにやける顔を蓮の頭を撫でることで何とか誤魔化しつつ、
「いいよ、むしろ一生いてほしいくらい」
「そ、そんなこと言われると……一生凛音ちゃんから離れられなく

なりそうやわ……」

むしろ、一生いてください。

頬を染めてそんなことを言う蓮を見て、そう思わずにはいられなかった。

＊

朝ごはんを食べ終わり、現時刻、八時三十分。

考えた結果、もうしばらくはここに留まって様子を見ようという結論に至った。

そうと決まれば、行動は早いほうがいい。

幸いここは多くの専門店が集まるショッピングモール、生活物資の調達には持って来いだ。

拠点も、この部屋で問題ない。

トイレの位置も近いし、まだ水も出る。

なにより、豊富な食料が直ぐ近くにあるのだ。

しかし、問題もある。

一つは暖房。

この、店員の休憩室のような部屋には、一つの灯油ストーブと、灯油用のポリタンクが三つ置かれていた。

が、ストーブの灯油残量を見ると針がE（エンプティ）の近くを指しており、またポリタンクのうち二つはもう空だった。

この季節、あと一つのストックだけでは心もとない、というか明らかにもたない。

早急な灯油、そして布団などの確保が必要だろう。

んで二つ目がそう、お風呂の問題。
休憩室といってもお風呂まで完備されているはずはなかった。
いくら冬で汗もかかないとは言え、女の子がお風呂に入れないというのは拷問にも等しい。
それに、体を清潔にするというのは、精神面でもかなり重要なことのように思える。
大きな桶（おけ）かなにかがあればお風呂の代わりにはなりそうなんだけど……。

私は必要だと思われる品を次々にピックアップしていった。

#11　これからどうしよう（後書き）

違うんだ！　なんかこう、カッコイイ能力バトルが描きたいんだよ。
味噌汁とかど～でもい～つ～の。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4343z/

目が覚めたら世界が終わってた

2011年12月27日22時45分発行